

火曜日、または《ポーパス・ソング》
Tuesday: or *Porpoise Song*

リチャード・コーエンのタクシーが乗客を送り届け、例によって国際軌道第一宇宙港は第二ターミナルに舞い戻ったとき、時刻は彼のナイト・シフトがそろそろ終わろうかという頃合いだった。じきに、ラッシュ・アワーが訪れるだろう。

相も変わらず、彼の相棒である黄色い車体は、白が基調のターミナルの風景にあまりなじまなかったが、それについてリチャードが気にすることもなかった。むしろそれによって、所有車両十台に満たないこぢんまりとした会社がやっていけるだけの、適度な集客効果さえ望めれば、それでよいのである。

リチャードはハンドルから離れた手を組んで前に伸ばし、固まりかけた肩の筋肉をほぐした。次いで首をゆっくり回しながら車載ナビに表示された時間を眺める。

デジタルで表示された時刻は、午前七時過ぎだった。会社から新たな客の情報も送られてこなかったし、もうしばらく待って客が来なければ、このまま帰投することになりそうだった。

リチャードが眠たげに長いため息をつきながら、身体を背もたれにあずけたときだった。リア・ドアが、がちやりと音を立てて開き、そして素早く閉じられた。

リチャードは反射的にバックミラーに目をやった。しかし、後部座席に人影は見えなかった。はてな、と不審に思った彼は身をよじり、あらためて運転席と助手席のあいだから後部座席を眺めてみた。が、やはり人はいない。

「いたずらか……」

リチャードがそう思い、身体を運転席に戻そうとしたとき、下のほうから「くちゅんっ」という可愛らしいくしゃみが聞こえた。彼はぎよっとして音のしたほうを見やると、後部座席の足許に身体をうずめて寝そべっている小柄な少女と目が合った。少女は、ひと足遅かった左手を口に当てて、じっとこちらを見ている。

思いもよらない出来事にリチャードが「あっ」と声を上げそうになると、少女は右手の人差し指を立てて口元に当てた。そして、鋭い眼差しで「そのまま黙ってて！」と言葉なく訴えた。このおかしな状況にすっかり気圧けおされ、リチャードは出かかった声をつばと一緒に飲

み込んだ。

そのときリチャードの視界の端で、何人かの男女がバタバタと通路の向こうから走ってくるのが見えた。スーツ姿の中年男女三、四人と、ステーションの警備員ふたりが横並びに走っている。その物々しい雰囲気、リチャードは思わずそちらに顔を向けそうになった。しかし、少女は首を横に振ってそれを制止した。

車内でこう着状態のふたりをよそに、彼らは慌しくリチャードのタクシーのそばを通り過ぎた。ふたりが何秒か見つめ合ったのち、少女は緊張した声で小さく「行った？」とリチャードに尋ねた。

すっかり雰囲気呑まれたリチャードは、少女に言われるがままに、そっと男たちが走り去ったほうを見やった。すでに彼らの姿は道ゆく人々の雑踏のなかに消えていた。

「ああ、そのようだ」

そう答えながら、リチャードはハタと冷静さを取り戻した。そして、ふつつつと湧き上がって然るべき疑問の数々を少女に尋ねようと再び振り返った。

すると少女は「車を出して！」と体勢をそのままにぴしやりと言いつつ放った。すこし日本なまりがある。

「これ、タクシーでしょう？　そして、わたしは客」

有無を言わさぬ口調に「うぬ……」としか返せなかったリチャードは「子ども相手になんと情けないことか」と自責しながら運転席に座り直すと、シートベルトを締め直し、ブレーキを踏み、ギアをドライブに入れた。そして、周囲を確認してゆっくりとアクセルを踏み込んで、駐車スペースからタクシーを発車させた。そのまま車線に沿って、エアロックに通じる車道走る。

「お客さん」釈然としない思いに憤りを感じながらも、リチャードは努めて平静に少女に声をかけた。「宙空に出ますからシートベルトを……」

そう言いながらリチャードがバックミラーを覗くと、すでに少女はシートベルトを締め、行儀よくちよこんと後部座席に座っていた。彼女は着ていた紺色の長袖ワンピースにできた皺を伸ばし、提げていたポーチを抱くと、リチャードへミラー越しにいかにも幼げな少女らしい笑顔を投げてよこしたのだった。

またしても出かかった言葉のやり場を失ったリチャードは、もはや脱力するほかなかった。そうこうするうちに、タクシーはエアロックの外へ走り出た。ステーションの白い光に満たされるばかりだった風景が、暗い宇宙にとって代わる。前方に見える地球も、夜が明け切っておらず、どんよりとした色合いをみせていた。

「それで……」リチャードは、苦虫を噛みしめる心地だった。「どちらまで」

「そうねえ」車内が極小重力になったせいで、ふんわりと浮かんだ髪の毛先をもてあそびながら、少女は首を傾げた。「運転手さんは、これからどこに行くの？」

「どうして？」

「どこそこのステーションだのアパートだのへ配車せよってのがあつたでしょう？」

「勤務明けて会社に戻る——ところだった」

「それ、どこにあるの？」

「すこし先のBC・六二八」

「宇宙港内じゃないのね」

「そう。小さな会社だからね」

「じゃあ、そこまでお願い」

「は？」

「運転手さんの会社——（コージイ・キャブ）だったかしら——まで」

いよいよわけがわからない。リチャードは頭を片手で抱えて「むむむ」と呻くと、ウインカーを出して航路の路肩に停車した。

「お嬢さん」リチャードは身をよじり、後部座席の少女を向いた。「お遊びはここまでだ。君、名前は？ ご両親はどこ？ こんな早朝になにを？ ところで……」

ふつふつと湧き上がってやまない疑問を思わずまくし立てるリチャードをきよとんとした顔で見つめた少女は、やがて小さく嘆息した。

「あら、運転手さんはいつから警察に転職したの？ 運転手さんがタクシー・ドライブであり、わたしがその客である以上、わたしにその個人的質問に答える義務はないはずよ。それに、大人は信用できないわ」

「あのねえ……」リチャードはうんざりした。「言いたくはないが、君、万引きかなにかやったんじゃないだろうね」

「心外！」少女は頬をぷっくり膨らませて、プイツとそっぽを向いた。「言うにこと欠いて人を泥棒扱いするなんて」

「じゃあ、警備員と一緒に走っていた連中はなんだい？ 君を追いかけていたんだろう」
「逃げてたのはたしかだけど……」

少女はわずかに言いよどんだ。

「もし連中が警察なら、僕まで犯罪ほう助で罪に問われてしまう」リチャードはぜいぜいと喘いだ。「ああ、なんてことだ」

「んもう、おじさんのくせに子ども相手に情けない声を出さないで」少女はやれやれと首を振った。「連中は警察じゃないわ」

「じゃあ何者だい」

「知るもんですか」

「嘘をつくな」

「疑り深いんだから」

「一応、性善説支持者ではあるし……」身をよじる体勢に疲れたリチャードは、腕を組んで前に向き直った。「それに君の言うように僕は大人でおじさんだ。が、君にしたって不審な点が多すぎる。信用できないね」

「あら、おじさん」だって自覚はあるのね」少女は肩をすくめて片方の眉をついと持ち上げた。「認めたがらない大人が多くて困るのよね。その点、運転手さんは良心的だわね。まだ若そうなのに」

「そうやって話をはぐらかす……」リチャードは両手で自分の顔を覆ってうつむいた。こんな年端もいかない——せいぜい十二歳ほどだろう——少女にまるめこまれそうになっている自分が情けない。「あのね、大人をあんまりからかうものじゃないよ」

「からかってやしないわ。それに、こうして逃がしてくれたことにも感謝してる」

「なら……」リチャードはもう一度後ろを向き直った。「どうして僕の質問に正直に答えてくれないんだい」

「だって……」少女は目を背けた。「もし本当のことを言ったらって、きっと信じてはくれないわ。だから、運転手さんの会社でもどこでも、適当な所に連れて行って下ろしてくれば、ぶいっ
と消えてあげる。料金だって払うわ……料金メーターは入っていないみたいけど」

「そうもいかない」リチャードは、諭すように言った。「ねえ。なにやら君がわけ有りなのは
わかった。だから、ひとつ僕に話してごらんよ。なにかの助けになってあげられるかもしれない。
それに、そうでなければ、僕もここから動かないぜ」

「見かけによらず強情ね」

「君ほどじゃないさ」

今度は少女のほうが一ひとりしきり呻いてから、観念したように肩を落とした。そして、両
手を上げて降参だとジェスチャーした。

「わかった、わかったわ。わけを話すから……でも」と前置きながら、少女は真剣で鋭い眼
差しをリチャードに向けた。「いいこと、絶対に疑っても笑っても駄目よ」

リチャードは、ゆっくりと首を縦に振った。

それを見た少女は、眼を閉じて短く息を吐くと、姿勢を正してリチャードに向き直った。

「わたし、超能力者なの。使える能力は念力パイロキネシス放火。いわゆるファイアスターターっていうや
つ。そして、わたしを追っていた連中は、わたしを捕まえてようとしている某組織の組員た

ち。とっても悪いやつらよ」

少女は、ひと息に淡々と語った。

リチャードは一瞬、少女の発する言葉の意味が理解できなかった。しかし、次第に彼の心は「またか」という不信と諦念でいっぱいになった。

「ほら、ごらんなさい。だから嫌だったのよ」リチャードの表情に滲んだ彼の心もちを読み取ったのか、少女もまた不満いっぱいにぶうたれた。「ほんとのことを言ったって誰も信じちゃくれないんだもの。これだから大人は！」

「なら、君の名前はチャーリーに違いない。それともリズ・シャーマンか」

「運転手さんってば、オタクだねえ」

「君も相当さ。オーケイ、警察を呼ぼう」

リチャードはジャケットにしまっている携帯電話を取り出そうとした。すると、少女は慌ててシートベルトを解き、ふわりと浮かんでリチャードの腕につかみかかった。

「待って！ それは困るんだってば」

「なおさらだ」

「いいわ、掛けてごらんなさい。そしたら、助けて、誘拐される」って叫んでやるから」

「そうまで言うなら、百歩譲って君がファイアスターだとしよう」リチャードには、も

はやなにが嘘か真か、自分の口走った言葉さえ、正確に理解できなかった。「その証拠を見せてもらおうじゃないか」

「ほんとに疑り深いんだから！」

「君が本当に能力者なら、言うとおりに協力しよう」

ふたりの視線が何秒かジリジリと交差した。

「……いいわ。でも、今度こそよ。これで、私を運転手さんの会社までいいから連れてってね。それから……」少女はリチャードの腕を離すと、後部座席まで戻った。「どうなっても知らないからね」

リチャードは、いよいよこの茶番からも解放されると、すこし心が軽くなった。嘘でもなんでもいい。どうせ、超能力など存在はしないのだ。しかし、このやりとりで少女の気が済むのならそれでいいではないか。そうなれば、然るべき対応もとりやすかろう。

リチャードは再び身をよじって、少女を見やった。

彼女は身体を固定するためにシートベルトを締めると、今度は念じるように両手を胸の前で合わせた。目を閉じて集中しているようだ。三秒。ふいに少女は短く腹から息を吐くと、合わせた両手を素早くスライドさせ、盆を持つように左手を掲げた。

するとどうだろう。

掲げた左の掌の上で、赤い炎がゆるやかに燃えているではないか。

その炎に照らされた少女の顔が、不敵な笑みに揺れた。

「まさか——」

いったい何秒が経つたろうか。リチャードがあっけにとられてみると、一拍置いて車装の火災報知機がけたたましく鳴った。その音で我に返ったりリチャードは、慌てて警報を解除した。間を置かず、今度は会社からの無線が鳴った。

「SC・八五六、SC・八五六」通信士のナターリアの声だ。「ちよつとリチャード。火災報知機が作動してみたんだけど、大丈夫なの」

「ああ、大丈夫だ」リチャードは応答した。「よくわからないが、誤作動らしい。火災ではない」「まさか、煙草を吸おうとしたんじゃないでしょうね」

「いくら喫煙者だからって、そんなことするもんか」

「そうよねえ。あなたに限って」無線機の向こう側で、ナターリアは不思議そうに首を傾げた。「とにかく、あんたもう上がりでしょう。気をつけて帰ってらっしゃいな。火災報知機の件は、技術部のほうに伝えておくから」

「了解。じきに帰投する。通信終わり」

リチャードは無線を置くと、恐々と後部座席に向き直った。

「どう？」炎はすでに消えていたが、彼女はじつとこちらを見つめ、およそ少女らしからぬ不敵な笑み浮かべていた。「なんだったら、もつと大きな火を起こしてもいいわ。ずいぶん加減したんだからね」

リチャードは答えに窮したが、その表情で少女は彼の内心を察したようだった。

「信じてくれたみたいね」少女はやれやれと表情を崩した。

リチャードの脳内には、いくつもの感嘆符と疑問符が交互に浮かんで消えた。いま見たものは、この少女はいったい……。

少女はリチャードの思考を止めるように、右手を前に突き出した。「質問はなし。さあ約束よ、車を出して。あんまりダラダラと路肩駐車してると、それこそ怪しまれるわ」

「あ、ああ……」

リチャードは言葉を呑み、おずおずと姿勢を戻すと、タクシーを慎重に航路に戻した。ドゥんよりとした沈黙が車内を満たす。

「ありがとう」少女は不意に言った。

「え？」

「無線で黙っていてくれて」

「ほかに言いようはなかったさ」リチャードは前方をしっかりと見ながら慥然と答えた。気

をしっかり持たないと、うっかり交通事故を起こしそうだった。「それに、よくわからないのは本当だ」

「そうね」そう頷いた少女の声音が、すこしさびしそうだったのはリチャードの気のせいだったろうか。「そうそう、これだけは聞かれる前に答えておくわ」

「なにをだい？」

「わたしの名前はチャーリーでも、リズ・シャーマンでもないわ。わたしの名前はマアヤ。マアヤ・ウチダ」

「マアヤ？」

「マ、ア、ヤ、よ。きちんと発音してね。リチャード・コーエンさん」

一瞬どきりとしたリチャードを見て、マアヤはくすりと笑った。

「そのこの名札に書いてあった。テレパシーまでは使えないから、ご心配なく」

そう言うと、マアヤは「よいしょ」と身体を前に傾けて腕を伸ばし、右手を差し出した。

「な、なんだい」

「握手。燃やしたりしないわ」

「ああ……」

リチャードはバックミラーを覗きながら、助手席と運転席の隙間から右手をできるだけ後

ろに差し出した。マアヤは差し出されたリチャードの手を持つとニッコリと笑って、二度、三度上下に振った。

「短いあいだだけど、安全運転でよろしくね」

○

その後、会社のある集合オフィス・ステーションBC・六二八に向かって宙空を走る車内は、静かなものだった。マアヤと名乗った自称ファイアスターターの少女は、後部座席で行儀よく座り、リチャードは黙々とタクシーを運転した。しかし、彼の脳内では慌しく自問自答が繰り返されていた。

もし、マアヤの言うとおり——そして現に証拠として見せつけられたとおり——本当に彼女がその能力者だったとして、果たしてそれが事実だと、どこまで信頼を置けるのか。

もちろんリチャードも、超能力が映画や小説といったフィクションで重宝されているのを知っていたし、むしろ、そういったSFジャンルは好むほうなので、ある意味において馴染み深い現象ではある。しかし、紙面やスクリーンというフィルターを介することなく実際に目の前で体験するとなると、これは話が別だ。

リチャードは、マアヤが先ほど提示してみせた能力の発現が真実かどうか判断する材料を持ち合わせなかった。リチャードにわかるのは、ただ眼前と見てしまった、という体験が真実であることだけだった。

リチャードとて、マアヤの見せたものが一種の手品でないかと考えなかったわけではない。しかし、彼女はその年齢以上に賢い少女だ。議論でも口喧嘩でも、いまのリチャードはマアヤに負けるに違いない。そんな彼女が、なぜそんな馬鹿馬鹿しい嘘をつく必要があるだろうか。そんな荒唐無稽な代物よりも、もつともらしい理由などいくらでも思いつけるはずである。

では、なぜマアヤはそうまでして、彼女を追いかけていたという連中——いわく某組織の組員で、とっても悪いやつら——から逃げようとしたのだろうか。当初の口ぶりからして、本人としては隠しておきたかったはずの能力を——いくらリチャードが折れなかったとはいえ——開示してまで彼を協力させようとしたのだ。よほどの理由があることだけは推察できるが、それはいったいどんなものだろうか。

リチャードは短く嘆息した。なんにせよ、彼にはあまりにも判断材料が足りなかった。いま彼が、これ以上のことをマアヤに尋ねてみても、「質問はなし」と彼女が宣言している以上、彼女はきつと口をつぐむはずだ。

なんの因果がリチャードをこんな思いがけない状況に追いやったのだろうか……。しかし、この賢くエキセントリックな少女の摩訶不思議なふるまいに、彼は興味を抱き始めてもいた。遠目には巨大なホワイト・バームクーヘンを横倒しにしてプラスチックでバックしたようにも見える集合オフィス・ステーションの姿がやがて大きくなり、表面の凹凸や窓からもれる光がチラつき出した。じきに会社へも着こうかというころ、リチャードはマアヤに声をかけた。

「なあに、運転手さん」彼女は目を閉じて、われ関せずといったふうに戻事をした。「質問なら受け付けないわ」

「そうじゃない」リチャードはかぶりを振った。「本当にこのまま会社に帰投していいのかい？」

「どうして？」

「そんなに逃げたがっているんだ。なんならオフィス・ステーションの別の適当な場所に降りてもいい」

「いえ、いいの」マアヤはきっぱりと断った。「目立つだけだわ。それに、変に寄り道をして、運転手さんの会社に怪しまれたら、お互い困るでしょ。料金メーターも入ってないし」

「しかし、小さな会社とはいえ、人の目はあるし、監視カメラもある。無事、抜け出せるのかい」

「大丈夫。スニーキングなら得意よ。なんならシステムを一時的にハッキングすればいいことだわ」

「物騒だなあ」

「いいから。ただ、いつもと変わりなく行動してくれさえすればいいわ」

やはり、彼女のやりたいようにやらせるほかないようだ。なにを言っても、この少女は聞く耳を持つまい。リチャードはやれやれと応じた。

「……了解イしまスました」

「結構」マアヤはフロント・ウィンドウの向こうに見えてきたエアロックを眺めた。「あそこがそう？」

「そうだ」リチャードは速度を緩めてハンドルを切り、次いで無線を手にとって、エアロック開口を求めた。

リチャードのタクシーがエアロックに滑り込んで、与圧処理を受けているあいだ、マアヤはシートベルトを解き、外から見えないように、座席足許のスペースに身体をうずめた。

「餞別代わりに教えておくと、車庫内に監視カメラは対角線上にふたつ。ほかにはオフィス玄関と各部屋の内側にしかないはずだ。どれも、首を振るタイプだ。車庫から玄関までの通路も基本は一本道だし、小柄な君なら死角を突けるだろう。社員は皆、いまの時間なら事務

室にいると思うが、そればかりはなんともいえない。ビルのロビーに降りるエレベータは玄関を出たら左へ行くこと」

リチャードは所定の位置にタクシーを停めた。手荷物を持ち、鍵やIDカードを抜き取って運転席から出ると、床を踏む自分の足音がコツンと響いた。さっと見回した車庫内には幸いにかどうか、人影はなかった。技術部のきょうの当直——たしかドルフだっただろうか——も、いまはやはり事務室にいるのだろう。そのことにホッとしたリチャードは、いつもそうするように後部座席のドアを開け、身をかがめて車内をチェックした。

「いま車庫は無人だ」リチャードはファイアスターターの少女を見下ろして、静かに告げた。「幸運を——と言うべきかな。だが、ここでバレルのだけは、勘弁してくれ」

と言いつつ、内心ではここで見つかったほうがまだ対応のしようもあるのと思うリチャードである。

「大丈夫、任せて。わたしは、運転手さんが出て行ったあとにここを出るから、いつもどおり振舞って」

「僕が先でいいのかい？」

「ええ、信用してるから」

「僕は大人だぜ？」

マアヤは、それには答えずに「じゃあね」とリチャードに別れを告げた。そして、そこから音もなく器用に車外にまろび出ると、今度は車体の下に潜り込んだ。リチャードは、しばらくしてから体勢を戻して、リア・ドアを開めた。そして鍵を閉め、車庫をあとにした。

リチャードは歩き慣れた通路を抜けて事務室のドアを開け、そこにいたナターリアやドルフたちとの挨拶もほどほどにロッカー・ルームに入った。すると、そこにはこれから仕事に出かけるらしいダニエルの姿があった。

「よお、リック」ダニエルはニカリと笑った。「上がりか」

「そうだ」リチャードは、自分のロッカーに荷物を放り込みながら頷いた。

「そういやおととい昨日、お前に聞いていた映画を観たんだが……」

「ああ……」先日ダニエルが失恋に嘆いていたとき、気晴らしになる映画はないかと尋ねられたので勧めたのだ。

「まったくひどいのを勧めてくれたもんだぜ」言葉とは裏腹に、ダニエルは莞爾と笑い、太くたくましい腕でリチャードを小突いた。「女が小説家の主人公を監禁した挙句、しくしくイタぶるなんてよ」

「普通の恋愛ものはもう飽きただろうし、反面教師にいいかと思ってね」リチャードは肩をすくめた。「すこしは気も晴れたろう」

「おかげで女が心底怖くなったよ」ダニエルは大きさに身震いしてみせた。「しばらくは、ひとりがいいや」

「そいつはよかった。礼にはおよばない」

「誰がするか、ばかやろう」ダニエルはまたニカリと笑って、リチャードの肩を小突いた。

リチャードはそんな他愛のない会話をしながらも、もしマアヤが見つかりでもしたらどうなるのだろうかと気が気ではなかった。奇妙に奥歯を噛み締めてしまう。

「どうした？」そんなリチャードの内心を察知したのか、ダニエルはふと怪訝そうにリチャードの顔を眺めた。「いつも以上に冴えない面して」

「ああ、変わりないさ……」リチャードは内心ドキリとした。「夜勤明けだから、そう見えるんじゃないか？」

「そうか、ならいいけどよ」ダニエルは、チラリと腕時計を見やると、彼はお気に入りポマー・ジャケットの襟を直し、ロッカーを閉めた。「じゃ、行ってくる」

「お疲れ」

ダニエルを見送ると、リチャードの口から思わず長いため息がもれた。

あの少女はうまく逃げ切っただろうか。ダニエルと鉢合わせなればいいが——そこまで考えたとき、リチャードは自分がいつの間にかマアヤにすっかり肩入れしていたことに気づい

て、苦笑した。もしかすると、なんらかの犯罪の片棒を担わされているかもしれないというのに、それに巻き込んだ当人のためにハラハラしている自分がおかしかった。

それでも心もち急いで退社処理を済ませると、リチャードは事務室のドアを開けた。廊下に出て玄関のほうに足を向けると、こちらにやって来る人影が目に入った。

「あ、リチャードさん」

それは、出社してきたらしい若き技術師リナだった。結ばれた髪はさらりと黒く、ダーク・グレイのカッター・シャツに重ねた黒い薄手のセーターというモノトーンの色合いが、彼女の体軀をより華奢にみせていた。それは、彼女の持つ卓越した技術の繊細さを思い起こさせるようでもあった。彼女はリチャードに気づくと、その理知的な目を彼に向けて、歯切れよく「お疲れ様です」と挨拶した。

リチャードは耳に涼しく届くその声にほっと安心し、いままでの奇妙な緊張がほぐれるように感じた。あとは二、三言いつものようにリナとなんでもない言葉を交わせば、さつきまでの珍妙奇天烈な事件から日常へと彼女が引き戻してくれるだろう——と、彼はそんなふう考えた自分自身に驚いた。なにをもって自身の心の安寧に彼女を重ねたのだろうか。そんな疑問がどこからともなく去来すると、なぜだか今度はしくしくと胸が騒ぐのだった。リチャードは、次々に沸く無意識的な連想を絶つべく、小さく頭を振った。とにかく、あと自

分がなすべきは家路に就くことである。それだけである。それで一件落着だ。

そんなことを考えながら、リチャードがリナに挨拶を返そうとしたときだった。彼女の後ろからふいに飛び出してきた小さな人影に、リチャードは「ぎゃっ」と悲鳴を上げそうになるのを必死で堪えなければならなかった。

その人影は、ついぞ別れたばかりの少女、マアヤだった。

「あつ、おじちゃんだ」マアヤは無邪気に声を上げると、肩から提げたポーチを揺らしながらリチャードに駆け寄った。「リチャードおじちゃん！」

目を白黒させるリチャードをよそに、マアヤは彼の腰に勢いよくしがみつき、きやつきやと無邪気に全身で再会の喜びを表現してみせた。リナはそんなマアヤの様子を眺め、その理知的な目を細めた。

「オフィスの玄関にいたんです。親戚のお子さんだって」

「あ、あア……」リチャードがしどろに頷くと、マアヤは抱きついていた腰を指でギリリと摘みあげた。「ひ、久しぶりだねえ」

「よかったね、マアヤちゃん」リナは、マアヤのそばにしやがんで彼女の頭をやさしくなでてやった。「おじさんに会えて」

「うん」マアヤは、さも嬉しそうに頷いた。「ありがとう、お姉ちゃん」

「すまないね、リナ」リチャードは、いまにも彼を引っ張って行きたそうにウゴウゴするマアヤに堪えつつ言った。「なんだか、世話になったみたいで」

「いいえ」リナは立ち上がって微笑んだ。「それでは、わたしもそろそろ」

「ああ」

「失礼します」

リナは提げていた鞆を肩にかけ直すと、マアヤに小さく手を振りながら事務室に向かった。「バイバイ！」マアヤは大きく手を振ってリナを見送ると、リチャードが着ているジャケットの右袖をつかんで「さ、行こう」とグイグイ玄関に向かって歩き始めた。それに引きずられながら、リチャードはちらりと後ろを振り返ったが、とくにふたりに注意を払う気配はなかった。

オフィスの玄関から出ると、リチャードはマアヤを連れてエレベータへと黙々と歩いた。同じ階にオフィスを置く他社の人々と幸いにも出会うことなくエレベータにたどり着くと、リチャードは階下のボタンを押した。

まもなくやってきたエレベータにふたり乗り込むと、リチャードは一階のボタンを押した。エレベータ内を流れる穏やかなインストゥルメンタルが、奇妙にリチャードの緊張感を煽る。やがてエレベータがふたりを乗せて地上階のロビーにたどり着くと、ふたりは各々の職場

へ向かう人々の流れをかわしながら、いまいたオフィス・ビル正面入口から脱出した。そして、ラッシュユ・アワーでざわめく通りをしばらく進んでから、リチャードは大きく息を吐いたのだった。

「うふふ、危なかった」マアヤはおもしろそうに笑った。「運転手さんもなかなか役者ね」

「肝を冷やした……」リチャードはやれやれとかぶりを振った。「なにが『おじちゃん』だ。いつから僕らは親類になったんだ」

「仕方ないじゃない」マアヤは肩をすくめた。「あと一步のところ、あのお姉さんとバツタリ出会っちゃったんだもの」

「スニーキングは得意なんだろう？」

「弘法だつて筆を誤るし、ホメロスも居眠りするわ」

「竜に眼を描き忘れたか、はたまた烟に種を蒔き忘れたか」

マアヤは「ふん」と不満げに鼻を鳴らした。

それで、トリチャードはマアヤに尋ねた。

「これからどうする気だい？」

「そうねえ……」マアヤは手を顎にあてがって考えた。「せつかくだから、もうちよつと付き合ってもらおうかしら。きょう一日ばかり運転手さんの家でかくま匿ってよ」

「なんだって？」リチャードはぎよっとした。

「だって、なんだか疲れちゃったし、お腹も空いたし、眠たいし。かれこれ二日くらい、寝てないのよね」マアヤは後ろで手を組んで身体を左右に振った。「運転手さんの家は、ここから遠いの？」

「待て待て待て」

「まあまあ。これもなにかの縁よ」

「待てと言うのに」

「それとも、燃やしてあげようか」マアヤは急にカッ目をと見開いて恐ろしい表情になったかと思うと、今度はニヤリと片方の眉を吊り上げた。「それより、大声を上げたほうがいいわね。この人通りのなか、きやあ、この誘拐魔めーっ」なんて叫べば効果的かしらん」

ふふん、と得意げに笑みを浮かべるマアヤに対して、リチャードはく、く、く、と声にならない声を上げるしかできなかつた。しかし、それは雑踏のざわめきに掻き消された。リチャードは、自分がこの小さな少女の掌中にあることをまざまざと理解して、がっくりとうなだれた。自分はいまだ、この少女の虜囚なのだ。

「どっちが誘拐魔だか……」リチャードは、ボソリとひとりごちた。

「聞かなかつたことにしてあげるわ」マアヤは自慢げに胸を張ると、リチャードのジャケット

トの袖を引つ張つて「行こう」と促した。彼は観念して歩き出した。「そうそ、自然にね」
「知らない人には付いて行くなと、教わらなかつたのかい」

リチャードはうんざりと言った。

「だって、わたしたちはもう知り合いだわ。そうでしょう？ リチャードおじちゃん」

リチャードは嘆息した。

「その呼び方はよしてくれ」

「お望みとあらば。運転手さん」

そう言つてリチャードをいたずらっぽく笑いながら見上げるマアヤに、彼はなにも答えられなかつた。ただ、リチャードはそのマアヤの表情に、すこし翳りの色を見たような気がした。

○

リチャードはマアヤに言われるがままに、帰路をなるべく平静を保つよう心がけながら歩いた。人通りのなか、いくつかの階層をさらに降り、BC・六二八に設置されたターミナルを指した。

白くフラットな風景も、そのなかですれ違う人波も、リチャードには毎日と同じように見

えた。ただひとつ異なるのは、彼のジャケットの袖をつかんだまま離さない傍らの少女だった。そもそも誰かと連れだつて歩くことがあまりないリチャードにとって、いま自分の様子を思い描くにたいそう不自然な気持ちがあった。

「ねえ」リチャードは歩きながら、ふと浮かんだ疑問を不安げにマアヤに尋ねた。「君の勢いに押されて、白昼堂々こうして歩いているけれど、大丈夫なのか？」

「なにが？」マアヤは頭をもたげた。

「つまり、君の追っ手に対して目立ってやらないか、と」

「それなら大丈夫でしょ」マアヤは、まるでため息をつくかのようにフツと鼻で笑つてリチャードから目をそらした。「あいつらが探してるのは、ひとりぼっちでウロウロしているはずのわたしだもの」

「そうなのかい？」

「そつ、見てのとおり。こっちに知り合いも身寄りもないし、それはあいつらも知ってるはず。まさか、こうして誰かと一緒に、しかもオフィス街を堂々と歩いているなんて考えてもみないわ。それに、ずっと被つてたニット帽もタクシーに乗り込んだときにポーチにしまつたし、見つかりっこないって」マアヤはそう言つて髪をはらつてみせた。「どう、安心した？」

「ン……」リチャードは釈然としないまま、しかし頷くしかなかった。「まあ……」

「バス停はまだ？」

「もうじきだ」リチャードは進行方向を指差した。

リチャードは少女を連れて、いつも利用するバスの定期便に乗り込んだ。朝のこの時間、住宅ステーション方面へと向かうバスの車内は空いていて、客席には難なく座ることができた。客席にいる客も、いつもどおりまばらだった。

彼は、いっそマアヤを強引に振りほどいて逃げ去ってやろうかとも考えたが、なぜだか気が引けた。マアヤは、バスの席に着いてなお、リチャードの袖を離そうとはしなかった。

三十分ほどで、バスはリチャードが部屋を借りている集合住宅ステーションT.M.三一棟に到着した。そこで降りたのは、リチャードとマアヤのふたりだけだった。ふたりが降りたのを見届けると、バスは次の棟へ向けて走り去っていった。

リチャードの部屋に向かうには、バス搭乗口からさらにすこし歩かなければならなかった。遠心重力を作り出すためのリング状の軸に、いくつかの四角い居住ブロックが数珠の玉のように区分けされているためである。

ふたりは、緩やかに弧を描く廊下をしばらく歩き、エレベータをふたつ乗り継いで、さらにもう三分ばかり歩き、リチャードの部屋へ通じる青いドアの前にたどり着いた。リチャー

ドはドアに鍵を差し込んで施錠を解きながら、区画の入り口でポストを確認してこなかったことを一瞬後悔したが、どうせたいしたものなど届いていないだろうと思い直した。

リチャードはドアを開け、少女に先に入るように促した。

「あの、お手洗いはどっち？」

「その、左手のドアだ」と指差しつつ、リチャードは内鍵を掛けた。

マアヤがトイレに駆ける小さな足音を聞き過ぎながら、リチャードは短い廊下を抜け、リビングに入った。電灯を点けてエアコンを調節すると、さらに奥にある寝室へ向かう。ジャケットをクローゼットにしまい、ポケットから鍵やら財布、携帯電話を引っ張り出してベッド脇の卓上に置いた。卓上の小さなデジタル時計には午前九時四〇分と表示されていた。

リチャードが寝室を出ると、マアヤはリビングの入り口に立っていた。

「インテリアの趣味はいいみたいね。ちよつと狭くて飾り気はないけど、なかなか綺麗に片付けられているし」マアヤは室内をぐるりと見回した。「あら？」

やがてリビングの左手の壁一面に据えられた大きな本棚を見つけると、彼女はぼてぼて駆けていって感嘆の声を上げた。

「すごい。映画のソフトがいっぱいだ。それに本も」

「ささやかな趣味さ。といいつつ、そんなに数はないよ」

マアヤは「へえ」と頷いて、後ろで手を組んで、左から右にと眺めた。「でも、オールデイーズが多いし、モニターもちよつと大きめだし、本当に好きなのねえ」

リチャードは、部屋の中央付近にモニターと向かい合うように置いてある灰色の三人掛けソファに身を沈めた。座ってしまうと、いっぺんにきょうの疲れが押し寄せ、そのままずぶずぶとやわらかなソファに呑み込まれそうだった。

「でも、いまだきディスクや紙の本ばかりなのも珍しいんじゃない？ 配信は使わないの？」

「できれば手に持てる実物のあるほうが好きなんだ」

「ふうん」マアヤはくすくす笑った。「パパみたいなこと言っちゃって」

「そうなのかい」

「ええ。電子書籍はいくら読んでも残りの厚さが減らないから嫌だって」

「へえ」リチャードは思わず頷いた。「いいこと言うね、君のお父さんは」

「でしょう」マアヤは嬉しそうに歯を見せてはにかんだ。「でも、わたしは電子媒体も捨てがたいんだ。検索機能を覚えるとかどうしてもね……、これって横着かしら」

「いや、それも然もありなんさ」

「そうかしら？」

「価値観は押し付けるものじゃないよ」

「変わってるなあ」

「そうかい？」

「ええ、とつても。あつ、これ懐かしいなあ……昔、パパと観に行ったやつだわ」

「もし観たければ、好きに観たらいいよ」

リチャードは欠伸まじりに、棚に並んだ背表紙の列を眺めるマアヤに向かって言った。すると少女はくるりとリチャードに振り向いた。

「ね、それよりお腹が空いたわ」

リチャードは頷いた。

「僕もだ……なにか作ろう」リチャードは膝に手をあてがって立ち上がると、台所にあるはずの食料を思い浮かべた。「そうだな、スパゲティでも」

「素敵」

「味は保証しかねるがね」

リチャードがキッチンで水を注いだ鍋を火にかけ、冷蔵庫のなかを覗いていると、「わたしも手伝う」とマアヤがやってきたので、サラダを作るように頼んだ。彼女が慣れた手つきでレタスやキュウリを切り刻むあいだ、リチャードは麺を鍋に投げ込み、買い置いたトマトの缶詰や鶏のひき肉などを用いて簡単なソースを作った。

二十分ほどでささやかな食事の準備が整うと、ふたりは料理を持ってリビングへと戻った。「普通さ……」ソファの前に置かれたテーブルに湯気の立つスパゲティを入れた器とサラダの小皿をそれぞれ並べながらマアヤが言った。「食卓つてものがキッチンに別にあるんじゃないの？」

「うーむ」リチャードはグラスにミネラルウォーターを注いだ。「なければないで、困ったこともないからなあ」

「あらそう」

ふたりはソファの両端にそれぞれ腰掛けると、どちらからともなくスパゲティをすすり始めた。リチャードが向かいの壁掛けモニターの電源を入れると、画面からは当たり障りのない、無味乾燥なニュースが流れ出した。

「うん、けっこう美味しい」マアヤは満足げに言った。

「そりやどうも」

「あら、わたしの作ったサラダのことよ」

「そうですか」

「スパゲティは、まあ、まずまずね。パパのほうが上手だけど、及第点つてとこかな」

「ありがとうお言葉」

「くひひ」

料理がふたりの胃袋に収まってしまうと、リチャードは食器を集め、キッチン流し台へ置いた。リビングに向かって「紅茶を飲むかい？」と尋ねると「いたたくわ」と返ってきたので、棚から白いマグカップをふたつ取り出し、安物のアールグレイのティーバッグを放り込んだ。先にセットしておいた電気ケトルからお湯を注いぎながら、もう一度リビングへ「砂糖かミルクは？」と尋ねると「いらぬ。ストレートがいい」とのことだったので、リチャードは湯気の立つ紅茶をこぼさないように気をつけながら、マグカップを両手にキッチンをあとのした。

彼がリビングに戻ってみると、マアヤはソファにうつぶせに寝転がり、曲げた脚をふらふら空中で揺らしながら、見るでもなくモニター画面に映るニュース番組を眺めていた。

「そういえばさ……」マアヤは顔だけリチャードに向けた。「運転手さんって煙草を吸うんじゃないかって？ 無線でそう聞こえたけど」

「吸うけれど、どうして？」

「灰皿が見当たらないし、煙草の臭いもほとんどしないから不思議だなと思って」

「そんなに数を吸わないし、吸っても一番軽いやつなんだ。それに部屋では吸えないのさ。喫煙所でない」と

「ふうん。案外、宇宙も窮屈だわね」

リチャードがテーブルにマグカップを置くと、マアヤは起き上がって、ソファに座り直した。

「ねえ、この部屋、友だちとか呼ばないの？」

「なぜ？」

「なんとなく、ね。強いて言えば、この部屋の雰囲気？」

それは僕がつまり——と言いかけたリチャードは、あることに気づいて思わず笑いがこみ上げてしまった。

「なあに？」マアヤは熱い紅茶を息で冷ましながら首を傾げた。「急に笑い出したりして」

「いや……」リチャードはこみ上げる笑いを堪えつつ、ソファに腰を下ろした。「この部屋に招いた客は、君がはじめてだと思ってるね」

「うそだあ！」

「本当さ」

「いくら運転手さんでも、友達のひとりやふたりいるでしょう」

「そりゃあ宇宙こうちと地上くじに何人かはいるけど、皆の住所はバラバラだし、会うとすれば外だ。といって滅多に会わないし、僕自身が出不精で筆不精だからなあ……」

- 「じゃあ、たとえばご飯なんか、いつもひとりここで食べてるわけ？　こんなふうに」
- 「ひとりつてことはない。コディ・スミット、マクフィーやラフィー・キャシディ、ニコラス・ホルト、グイ・ルンメイ——往年のキアヌ・リーヴスやステイサムにナタリー・ポートマン、さらに遡ればマックイーンやジャッキー・チェンなんかと食卓を囲んださ」
- 「あきれた。全部映画じゃない。しかも古いのばかり」
- 「気の持ちようさ」リチャードはソファに身を沈めた。「とはいえ、まさか僕を誘拐してここまで連れてきた犯人が、最初の客とは情けない。くわばら、くわばら」
- 「たしかに運転手さんは誰かと遊んだり、人を部屋に呼んだりつて雰囲気じゃないけど——」
- マアヤは部屋とリチャードをしばしばと眺めた。「でも、あのお姉さんは？」
- 「お姉さん？」誰のことかと、リチャードは一瞬迷った。「ああ、リナのことかい？」
- 「そうそう。ね、彼女ってどんな人？」
- 「たいへん腕のいい技術師だよ。精緻で正確だ」
- 「えっと、そうじゃなくて——」望んだ答えが得られず、マアヤはちよつと間を置いた。「つまり、運転手さんの恋人じゃないの？」
- 「まさか」リチャードは、なぜそうなるのかと驚いた。「彼女はただ、会社の後輩だよ」
- 「なあんだ、つまんないの。てつきり、そうなのだとばかり思った」

「なんでまた」

「彼女、運転手さんを見つけたとき、すごく嬉しそうだったもの。それにずいぶん仲がよさそうに見えたわ」

「勘違いでなければ、考えすぎだよ」リチャードはかぶりを振った。

「そんなリチャードに、マアヤはなおも食い下がった。

「デートは？」

「このあいだ誘われて、仕事終わりに食事はしたけれど……しかし、これはデートってこともないだろう。単に時間が被っただけだし」

「ふうん。なにを食べたの？」

「簡単なイタリアン」

「そのときの話題はなに？」

「その日あったこととか、会社のこととか、多少の個人的な話題とか——だったかな。たいしたことは喋ってないと思う」

「そのあとは？」

「バス・ターミナルで別れたよ」

「どうしてよ」

「どうしてって、お互い住んでる区画が違うからさ」

マアヤは「へーえ」と力なく頷いた。

「あのお姉さん、眉がきりつとしていて綺麗だし、知的でやさしくて、とつても素敵。いうことないじゃない」マアヤは、じろりとリチャードをにらんだ。「なにが不満なの」

「そりや、君の言うとおりで彼女はいい娘だつてことに違いはないけれど、それとこれとは関係がないさ。それに、よしんばそうだったとしたつて、万が一にも僕なんかは君の言うような——つまり、そういう対象じゃないさ」

「なぜ、そう思うのよ？」

「そりやあ……」リチャードは肩をすくめてみせた。

その様子を見て、マアヤは深く肩を落とした。

「運転手さんつてば、本当に疑り深いのねえ。それとも、よっぽど鈍感か」

「君こそ、妙なことにこだわるじゃないか」

「あーあ」マアヤは、そう問うリチャードを無視して大げさにため息をついた。「せっかく運転手さんをからかって遊べると思つたのに。つままないなあ」

マアヤはわざとらしく唇を尖らせ、「つままないつままない」と両足をばたつかせた。

「まっ」マアヤはマグカップを手に取り、紅茶を口に含んだ。「これで、いい予行演習になつ

たでしょ」

「なにを言っとるんだ」リチャードは飲みかけた紅茶を吹き出しそうになった。「僕の話はどうでもいい。問題は君のほうだ」

「わたし？」マアヤはきよとんと目を見開いた。「あ、もしかして運転手さんってばロリコン？ 困るなあ、わたし」

「違う」してやったりとクスクス笑うマアヤに向けて、リチャードは大げさにかぶりを振るしかない。「君のいまの状況のことだ」

「運転手さんの部屋で、紅茶を飲んでいるわ」

「あのねえ」

「冗談はともかくとしても……」マアヤは言った。「あんまり喋りたくないな」

「そうはいつでも——」リチャードは紅茶をひと口飲んだ。「君の逃亡の片棒を担いだ身としては気にもなるよ」

「それはそうだけど……」

「せめて、これからどうするつもりなのか、とか」

「あるところに行くの」マアヤはリチャードが折れそうにないと諦めたのか、そっけなく答えた。

「どこに？」

「それは内緒。もし運転手さんが知ったら、面倒に巻き込まれると思う」

もうすっかり巻き込まれている気がする、と口に出そうになったのをリチャードはグツと堪えた。

「ちよっと、やることがあってね」マアヤはまるで興味がないといったふうにした。「いまは、その途中」

「それはどんな——」

リチャードの質問に短く嘆息したマアヤは、ふいに姿勢を正した。

「わたしね、ママの顔を知らないんだ。わたしを生んですぐに亡くなったそうよ。だから、わたしはパパしか知らないの」

てつきり、またはぐらかした答えしか返ってこないものと思っていたリチャードは、マアヤの口から語られた言葉に虚を突かれた。どう反応していいかわからず、頷くのが精一杯だった。

「わたしからは想像できないだろうけど、パパはとても穏やかな人で、わたしにいろんなことを教えてくれたわ。歴史や科学のこと、いろんな本や、映画を観せてくれたし、思いやりや親切について教わった。学校では教えてくれなかったことよ」

「……素敵なお父さんだ」

「ええ。わたし、大好きだった。でも、そのパパも先ごろ死んだわ」

「そんな……」父の死を淡々と告げるマアヤに、リチャードは言葉を失った。「なんと
言っているのか……」

「そんな顔しないで、運転手さん」マアヤはリチャードに笑顔をよこした。「当たり前障りのない死因、お定まりの葬式を経て、よくいる孤児みなしこの一丁上がり——でも、
真実はそうじゃない。パパは殺されたのよ」

「なんだって？」リチャードはさらに狼狽した。

「証拠だつて見つけた。世間は騙せても、わたしは騙せない」

「それは、君を追っている組織と関係があるのかい」

「その連中が殺したのよ」

「やはり日本の……」

「あ、わたしが日本育ちってわかった？」

「君の喋りのアクセントと、名前の感じだね」

「へえ。運転手さんは英イギリス国でしょう」マアヤは問いかけるように首を傾げたが、リチャ

ードは反応できなかった。「まあ、さっきの質問の答えはイエスよ。たぶん政府も絡んでるんじゃない

ないかなあ。二十一世紀になってすら全体主義ワナビーだった国だもの。しかたないわ」

「なんのために？」

「知るもんですか！」マアヤは不意に立ち上がって、天井を見上げた。声が、小さく怒気に震えている。「わたしの能力と関係があったのかもしれないし、そうでないかもしれない。どんな理由にせよ、連中がパパを殺したことに違いはないわ」

「しかし、警察には？」

「歳のわりに青いんだから、運転手さんって」マアヤはリチャードに向き直ると、やれやれと首を振った。「大人が、こんな子どもの言うことを聞くと思う？ 世間だってそう。だから、自分ですることにしたの」

「まさか君の目的は……」

リチャードは脳裏に浮かんだ言葉のあまりの攻撃性に、それを口にするのを躊躇した。だが、この利発な少女には、そんな単語はお見通しだった。

「復讐——？」マアヤはフツと息をついた。「そうともいえるかもね。でも、なにもパパの仇を殺そうなんて思っていないわ。それじゃあ連中と同じ穴のムジナになってしまうもの。そうじゃなく、わたしは、わたしからパパを奪った罪の償いを、社会に還元したいの。そのため、わたしは自分のファイアスターターとしての能力を最大限に使わなければならない」

マアヤがひと息に語り上げた内容に、リチャードは継ぐべき言葉が浮かばなかった。彼女はたったひとりの肉親を亡くし、その直接の原因となったという連中に闘いを挑もうとしているのだ。その小さな身体ひとつで……。

重たい沈黙が、リビングを満たした。空調の音と、ニュースの原稿を読むアナウンサーの平坦な声だけが細々と聞こえた。

「運転手さんは——タクシーのなかで言ってたけど——性善説派よね」マアヤは唐突に話題を変えた。「でも、わたしは性悪説派なんだ。人間は生まれながらの悪人だからこそ、努めて知性的でかつ理性的でなければならぬと、そう思ってる。だから、性悪説を盾に悪事を働いて人を傷つけるやつら、なかんずくそれを自己肯定するやつらを、わたしは許せない。だからこそ運転手さんに誓うわ。わたしの目的はパパのため——いいえ、世界を皆にとつてすこしでも善くするためのもの。そのためにわたしが、より大きな炎を上げなければならぬの」

「いったい君は……」

そう問うリチャードが見つめる少女の顔には強い決意と、不敵な笑みが浮かんでいた。タクシーのなかでリチャードに能力を顕したときに見せたのと同じ、少女らしからぬ表情に彼は圧倒された。ただ怒りだけでも悲しみだけでもない、どこか達観すら感じられる表情だ。

「運転手さんは、もうご存知だわ。わたしはファイアスターターで、正義の味方。運転手さんの好きな、映画の主人公と一緒よ」マアヤはそう力強く宣言すると、ふっと表情を崩した。「それが終われば、どこかの児童施設の扉を叩くつもりだけど……まっ、いまに見てて」

そう言ってマアヤは身体を再びソファにあずけ、マグカップの中身を空けた。おいしそうに紅茶を飲み干す仕草は、いまの彼女の告白など似合いもしない天真爛漫な少女そのものだった。

そんな彼女を見ながら、リチャードはなにか言葉をかけるべきなのだろうか、そうだとしてなにをどう言ったものかと必死に考えを巡らしたが、なにも思いつけなかった。

「ねえ、運転手さん」マアヤは空になったカップをリチャードに差し出した。「紅茶をもう一杯もらえない？ あんまり喋ったんで喉が渴いちゃった」

「ああ……いいよ」リチャードは、すっかり冷めた自分の紅茶を飲み干して、ソファから立ち上がった。「また、ストレートでいいのかな」

「ええ」マアヤは紅茶が胃の腑に染み渡るのを確認するように、小さく欠伸をした。「ありがとう」

リチャードが新しく紅茶を淹れてリビングに戻ると、マアヤはすでにソファの上で小さく寝息を立てていた。

きつと疲れ切ってしまったのだろう。思えば、彼女がタクシーに転がり込んできたのは日の出前の時間だったし、二日以上寝ていないと口走っていた。

リチャードは、その眠りを妨げないように気をつけながら、慣れない手つきでマアヤをそつと抱き上げると、寝室へ運んでベッドに寝かせてやった。靴を脱がせ、布団を掛けてやる。彼女が大事そうに提げていたポーチは、彼女の枕元に置いた。

マアヤの語ったことが、どこまで真実なのか、いまもってリチャードには判断できなかった。しかし——と、リチャードは、静かに寝息を立てる少女を見下ろしながら思った——彼女にとって、おそらくそれらが真実なのだろう。

「映画の主人公と一緒、か」

リチャードは、声に出さず唇だけで呟いた。もし事実が語られた言葉どおりだとすれば、それはとてつもないことだ、とリチャードは思った。彼が映画を観るのは、自分では決して果たせないことをフィルムのなかの主人公たちが成し遂げてくれるからだ。そしてマアヤは、そんな主人公たちのように、欺瞞に満ちた世界を正そうと闘っているのだ。では、そんなふうに自分を喻えてみせたマアヤの小さな肩には、どれほどの重荷が押し掛かっているというのだろうか。少女の寝顔に、それは読み取れない。

やはり警察なりに連絡すべきだろうか——リチャードはベッド脇の卓上に投げ出した携帯

電話を見やり、手を伸ばそうとした。が、結局やめた。

きっと大人としてそうすべきなのは理解できたが、なぜだか気が引けた。マアヤがあんなに語るのを拒み続けてきた真実をリチャードにあえて語ったのは、彼女がリチャードを信頼してのことだったかもしれないではないか。あるいは、ただ単にリチャード自身がこの奇妙な現状を他人に説明することを疎ましく思っているだけなのかもしれない。

リチャードはもう一度マアヤを見やった。いまは疲れ果てて眠っている彼女が今後、どうするつもりなのか。それもまた、わからない。

わからないことだらけだ。

リチャードは静かに首を横に振ると、きびすを返した。寝室の灯りを消し、扉をそつと閉めた。そしてリビングへ戻ると、彼はソファへ身を深々と沈めた。

両膝に肘をあてがって両手を組み、その上に顎を乗せて、いろいろあれこれ思案してみたが、リチャードは結論を出せなかった。思考は、彼の視線と同じく、ただただ宙をむなしく切るばかりだった。迷走する彼の思考を反映するように、ため息まじりの長い欠伸が、リチャードの口からもれた。

リチャードは、まだ湯気の立ち上る残りの紅茶をひと息に飲むと、部屋の灯りを消し、靴と靴下を脱いでソファに仰向けに寝転んだ。クッションを枕に、うごうごと身体の位置を調

整する。とにかくちよつと眠ろう。きょうは、いささか疲れた。これ以上考えても混乱するばかりだ。すこし眠れば、頭も多少は冴えるだろう。そしてマアヤが起き出してきたら、今後のことを話し合えばいい。きょうと明日はまるまる非番だから、時間はある。

そうしてリチャードが暗い天井をぼんやりと眺めるうち、やがて向こうのほうから白い光が、まるで映画館のスクリーンのように迫ってきた。いや、迫ってきたのではない。そこへ向かったのは自分のほうだったのだ。

リチャードは暗がりから白い無機質な廊下へ出た。人通りはない。足音が響く廊下をリチャードは走った。角を曲がると、マアヤが彼の先を走っている。リチャードの後ろから無数の足音が追ってきた。早く少女に追いつかねばならない。でなければ、ふたりともやつらに捕らえられてしまう。急がなければ。足を速めようと踏み出した足音が、廊下に大きく反響した。その音に振り向いたマアヤの表情が凍る。それを見て、リチャードは気づいた。自分はマアヤと追われているのではない。

自分がマアヤを追いつめているのだ。

いやな動悸がして、その痛みによりチャードは目を覚ました。目を開けると、暗いリビングの天井が見えた。どうやら夢を見ていたらしい。鼓動が早く、額が汗でうつつすら濡れているのがわかる。

リチャードは先ほどまでの光景が夢だったことに、ふっと笑いながら再び目を閉じた。ソファなどという、普段とは違うところで寝たからだろう。現実味はないが、現実感のある妙な夢だった——そう思いながら、リチャードもう一度、眠りに就こうとした。

そのとき誰かが彼のすぐそばに立った気配があった。なぜだかリチャードは、そこにいるのがマアヤであるとわかった。彼女は暗がりのなか、リチャードをじっと見下ろしているはずだ。これも夢だろうか、リチャードは自問した。恐る恐る目を開ければ、彼女は唇だけで静かに、しかし、はつきりと言うだろう。

「眠って」

その途端、リチャードの身体のとあらゆる力が抜けた。眼球がグルリとひっくり返ったような感覚があった。しん、とすべてが静まり返ったかと思うと、彼は奈落に沈んだ。その速度は、徐々に増加し、彼はさらなる深みへと、

落ちてゆく落ちてゆく落ちてゆく

落ちる落ちる落ちる

沈む沈む沈む……………

「あつ」という自分の声に目が覚めたとき、リチャードは自分がソファから転げ落ちたのだと知った。外し忘れていた腕時計の文字盤を見ると、もうじき十六時半になるかという時

刻だった。リチャードは欠伸とも呻きともしれない声を上げて起き上がると、ふいに使った覚えのないタオルケットが自分に掛かっているのに気がついた。

おや、と首を傾げながら、リチャードはきのう出会った少女のことを思い出した。室内を見回してみたが、リビングにその姿はなかった。立ち上がって彼女を寝かせた隣の寝室に入ってみたが、ベッドの上にも少女はいなかった。寝惚け眼をこすりつつ、はてな、と思ったりチャードは再びリビングに戻ると、今度はキッチンや洗面所に繋がる廊下に出てマアヤの名前を呼んだ。

「おうい、どこだい？」

しかし、いくら待っても少女の返事はなかった。聞こえるのはその声ではなく、かすかに響く空調の音だけだった。

奇妙な焦燥感に駆られたリチャードは、キッチンを見渡し、トイレや風呂場など部屋のあらゆるドアを開けてみたが、やはりマアヤの姿はなかった。一応、寝室に据えられた狭いクローゼットのなかも確認してみたが、結果は同じだった。

リチャードはリビングに戻ると、自分のつま先を眺めながら紫煙をゆっくりと吐き出すように唇をすばめた。そのとき、彼はテーブルの下から一枚の白い紙が覗いているのに気がついた。先ほど起きた拍子に机の上から滑り落ちたのかもしれない。

リチャードは身体を屈め、その紙を拾い上げると、そこには少々たどたどしいブロック体で次のような文面が綴つづられていた。

“——親愛なる運転手さん、きょうはずいぶん長いことお世話になってしまいました。これ以上は、運転手さんに重大な不利益が生じかねないので、わたしはここらでお暇いとまします。起こすのも悪いので、どうぞゆつくり休んでください……もとい、おはよう。タクシーの運転と一宿一飯とその他諸々の恩は、いづれまた。だって、さよならだけが人生だ。なに、縁があつたらまた会える。それじゃ！”

——感謝を込めて、マアヤ・ウチダ

追伸／＼とところで、勝手にシャワーとタオルを借りました。それでもなお運転手さんが起きないので、こうして文章をしたためていたのであります。はてさて、ついに最後まで起きませんでしたね。このお寝坊さん！”

リチャードは文面をすべて読み終えると、その手紙を持ったまま手を腰に当てた。そして、手紙の内容と室内の探索によつてはじき出された結論を、誰にでもなく呟いた。

「そうか。あの子は出発したのか……」

そう言葉にすると、不思議な喪失感にリチャードは襲われるのだった。なぜだかはわからない。考えてみれば、いやがるリチャードを強引に巻き込んだのは、あの少女のほうなのだ。だから、その原因が消え去って心もちは軽やかにせいせいしてもいいはずだ。だが、彼はどうしてもそんな気分になれなかった。

どちらにせよ、マアヤはリチャードのもとから去った。きっと、眠る前にマアヤが告白してくれた目的を果たしに、彼女は出かけたのだろう。突然のにわか雨のように現れたファイアスターターの少女は、同じように忽然と姿を消したのだ。

短いようで長い半日だった、とリチャードは思った。亡き父のため、皆にとって世界をすこしでも善くするために——そう宣言した小柄な少女の大願は、果たされるのだろうか。そういえば、彼女の念力放火の能力は真実だったのだろうか。それよりも、いまマアヤは無事であるのだろうか、怪我などしてはいないだろうか……結局あの子のことについて、なにひとつわからずじまいだった。否——リチャードは再び彼女の手紙に目を落とした——わかっ

てやれずじまいだった、というべきだろうか。

短い嘆息の後、リチャードは頭をもたげ、少女が開けて出て行った自室の青いドアのほうを、しばらくのあいだ眺め続けていた。

○

こうしてリチャードのもとに、いつもの日常が舞い戻ってきた。休みが明ければ、彼はシフトに従って出社し、乗客をここに運び、勤務時間が明ければ家路に就いた。部屋に戻れば、適当な食事を作ってはひとり空腹を満たした。ソファに腰掛けて本を読み、レンタル・ショップで借り、あるいは映画館に出かけて映画を観るなどした。ここ数年間、なにひとつ変わらない日々だった。

だが同時に、モニターから流れてくるニュースに、リチャードはいつもよりも耳をそばだてるようになった。あれから音沙汰のない——といっても、それを期待のしようもなかったが——マアヤの安否が、なんらかの形で示されはしないかという予感がしたからだ。

そうはいっても、そんな根拠のない予感など当たろうはずもなく、流れてくるニュースとえば、アメリカ大統領選挙の経過やIT産業でのテクノロジー導入、はたまたポップ・スターのスキヤンダルやどこぞの企業が犯した倫理規定違反、北欧の寒波予想に株価変動、エトセトラ、エトセトラと、いつもと代わり映えのしないものばかりであったし、そのどれもに、あの小柄な少女が入り込む余地はなかった。ウェブ上に掲載されている文字媒体のニュースを、リチャードは思い立って検索してみたが、やはりそれらしきものは見つけれなかつ

た。

右から左へ日々刻々と流れてゆくニュースの数々に「もしや」と思った内容がないことにリチャードはモヤモヤする反面、それに安心もした。古くから云われるように、便りがいいのはよい知らせだということもある。マアヤのことがなんらかのニュースになるのであれば、それは決して嬉しい内容ではないだろう。リチャードがあの子のニュースを見かけなければ、彼女は無事であるはずだ、と彼は思うようにした。しかし、そうはいつでも……と、すかさずその反証が頭をもたげ出すリチャードである。

そんなどつちつかずな心もちのまま、二週間が過ぎた。

その日の夜間勤務を終えてオフィスの事務室に戻ったリチャードをナターリアが呼び止めた。

「あんたに小包が届いてるわよ」

「僕にかい？」まったたく身に覚えのないリチャードは、きよとんと首を傾げた。「誰からだろう」「さあ？ あんた個人宛だったみたいだから、そこまでちゃんと見てないのよ。身内の人じゃない？」ナターリアは我関せずと肩をすくめた。「あんたのロッカーの上に乗っけてあるわ」「わかった、ありがとう」

親族や知人なら、会社ではなく自室に送ってくると思うが——と、リチャードは不思議が

りながら、ロッカー・ルームへと向かった。

ドアを開け、いまは無人のロッカー・ルームに入ると、リチャードはそのまま自分のロッカーの前に立った。そして、ロッカーの鍵を開けるより先に、右腕を伸ばしてロッカーの上を探る。すると、たしかに段ボール紙めいた感触が指先にあり、それを今度は両手でつかんでロッカーの上から引つ張り降ろした。

リチャードの手のなかには十センチ四方の本当に小ぶりの段ボール箱があった。ほとんど重さも感じないほどだった。宛名を見るとたしかにリチャードの名前があった。差出人を見ると、なにやら知らない団体名が判で押されており、その住所はサンフランシスコとなっている。

「まさか新手の詐欺か、あるいは爆弾じやあるまいな……」リチャードは胸中で恐々とひとりごちた。「いや、こんなうだつの上がらぬ市井しせいの人間をひとり標的にしてどうなるというのか」

リチャードは自分でも驚くぐらいの小心ぶりを振り払おうと首を横に短く振り、恐る恐る小箱の封を開けた。すると、なかには小型のプリペイド型携帯電話がちよこんと鎮座ましましていた。

「なんだこれは？」

思いがけない品物が出てきたことに拍子抜けとも安心ともいえぬ気分です。首を傾げながら、リチャードはそのプリペイド機を取り出した。すると、プリペイド機を固定する紙細工の下に、折りたたまれた封筒がさらに入っているのが目に入った。リチャードは、プリペイド機をロッカー・ルームの中央に据えられた折りたたみ式テーブルの上に置くと、今度は小箱から紙細工を取り出して封筒を手を取った。

小箱と紙細工をプリペイド機の隣に置くと、リチャードは三つ折りにされた封筒を伸ばし、それをためつすがめつした。白い無地の封筒で、封はしてあるものの、こちらにも差出人の署名などはされていない。眉をしかめながら部屋の明かりに封筒をすかしてみると、なにかが印字された書類らしきものが入っているようだったが、正体はわからなかった。

「はて……」

リチャードは短く嘆息すると、両手の指を使って封筒の端を破き、なかからその紙を取り出した。するとどうだろう、出てきたのは折りたたまれた新聞紙の切抜きだった。開いて日付を見ると数日前、しかも一面記事で、上部には〈ガーディアン紙〉のロゴが大きく躍っている。

リチャードは封筒を置き、いったいなんの記事だろうかと見出しの文字を読もうとした。その瞬間、テーブルの上に置いていたプリペイド機が突然ブブブと振動した。唐突な振動音

に思わず息を呑んだリチャードがそちらに振り向くと、着信を示すランプが光っている。鳴り続けるプリペイド機をリチャードは狼狽しながら手に取ると、通話キイを押して耳にあてがった。

「も、もしもし……」

リチャードが電話口におっかなびっくり話しかけると、スピーカーからは「はい！」という素っ頓狂なほど元気な声が返ってきた。

「よかった、会社に着いたのね。一発成功、グッド・タイミングだったなあ」

「あのう」リチャードは目を白黒させながら、おずおずと尋ねた。「どちら様？」

「わからない？ わたしよ、運転手さん」

「まさか……」リチャードは、スピーカーの向こうから聞こえる声の響きを記憶のなかから探り出した。「君、マアヤかい？」

「そつ、正解」電話の声の主は頷いた。「元気だった？ わたしがいなくなつてさびしく……」

「君こそ大丈夫なのか？」リチャードは少女の声を遮って尋ねた。「無事でいるのかい」

「ええ、大丈夫。大丈夫よ」マアヤは電話口の向こうで笑った。「万事順調、問題なし。この電話も安全だから安心して」

「いま、どこにいるんだい？」

「箱のステッカーを見なかった？ わたしはいまサンフランシスコにある児童施設にいるんだ。このあいだ入所したの」

「そうか……」リチャードは、ほっとため息をついた。安心で力が抜け、ふらふらと部屋の壁にもたれかかると、彼はそのまま床に腰を下した。「無事であるならいいんだ」

「心配性だなあ」

「あんな手紙を一枚置いて、急にいなくなるんだもの。そりゃあ心配もするさ」リチャードは無然と言った。「僕だって人の子だ」

電話口の向こうのマアヤは「フツツ」と小さく笑うと、そっと「運転手さんらしいや」と添えた。

「それで、その——」リチャードは一瞬どうするかを逡巡したが、結局尋ねることにした。「君の言っていた目的は、うまく果たせたのかい？」

「ええ、おかげさまで」マアヤは頷いた。「新聞の切抜きが一緒にあったでしょう？」

「ああ……」リチャードはプリペイド機を持つのは反対の手で、それを眼前に持ち上げた。「ちょうど読むところだったんだ」

「じゃあ読んでみて」

そう促すマアヤに従って、リチャードは紙面の文字を目で追った。

「——精密機器開発ならびに製造の分野で世界的シェアを展開する日本の大企業（パー／ソنز）の雇用体勢が、世界労働条約に対して大きく違反しているとする問題について進展があった。」

これは、包括的内部告発組織（リック・フォー・オール）——通称（リフオール (Letfall)）——によって先日明らかにされたもので、それによると（パー／ソنز）は、従業員への不当な拘束労働や賃金未払い、それに伴う過労死などの労働災害の事実があったにも関わらず、これらを不法に隠匿していたという。さらには、日本国内の労働基準監督組織に幾度も申し入れがあったにも関わらず、改善がなされなかったという情報もあり、永年に渡る政府と企業との不健全な関係性をも疑われる事態となっている。日本は国連加盟国のなかでも大きく遅れをとった五年前、ようやく国際労働機関の掲げる世界労働条約に完全批准していたが、その遅延理由が実態として浮かび上がった形となった。

昨日、この問題について国際労働機関は（リフオール）による告発内容を信頼に足る情報であると正式にコメントを発表した。タニア・コプリー国際労働機関事務局長は、これは（パー／ソنز）のみに留まる問題ではないとの見解を示し、「日本国内にいる全労働者の危機が

本件のように秘匿されている可能性があることは、これを看過できない。しかも、これを故意に政府側が無視していた実態をみるにつけ、文明国としての品性を疑うものである」として、国外組織による徹底した調査ならびに指導を展開すると宣言した。

現在のところ、（パー／ソンス）と日本政府は今回の告発内容に対して否認の態度を崩していないが、今後の展開が世界的に注目されている――”

リチャードは感嘆した。

「これを君がやったのかい」

「全部じゃないわ。わたしがやったのは、ほんの初手。（リフオール）に動いてもらうために、ハッキングした情報ソースを彼らに渡したの。その後のリークに足る裏づけや、国際機関やマスコミへの対応なんかは、わたしには無理なものね。」

（リフオール）の人たちが親身に、そして早急に対応してくれてありがたかったわ。それに彼らのおかげで、サンフランシスコに新たな拠点を持たしね。いいところよ。もしもシスコに行くのなら――って古い歌を思い出すわ」

「ううむ」リチャードは唸った。「しかし、難癖をつけたいわけではないけれど、これがいわゆる情報戦だったのだとしたら、どうして君は宇宙くんだりまで出てきたんだい？」

「敵さんのサーバー施設が月にあつたからよ。下手な小細工をするよりは、思い切り近くで仕掛けたほうが、むしろ向こうを欺けるかと思つてね」マアヤは楽しそうに笑つた。「ほら、虎穴に入らずんば虎子を得ずつてやつよ。灯台下暗しともいうかもね」

「なるほど……？」実際のところどうなのかを即座に判断できるほどの知識を持たないリチャードは、ただただ頷くしかなかった。「じゃあ、このあいだ逃げていたのは、月から帰りの道中だったのか」

「そういうこと。あと一歩つてところで見つかつちやつて往生したけどね」

「危なっかしいなあ」

「かつこよく言えば、危険はつきものつてね」マアヤの苦笑が聞こえる。

「……君のお父さんは、この記事にある（バー／ソنز）に勤めていた？」

「そう。その結果の過労死。にも関わらず、そうとは認められなかった」マアヤはさびしうに頷いた。「おとなしくて従順だったパパは、ただただ奴らに使い捨てられた挙句、どうすることもできずに死んでしまつたわ」

リチャードは少女の重い言葉に、小さく「そうだったのか」としてか返せなかった。

「でも——」マアヤは努めて明るい語調に戻した。「あのとき運転手さんに出会えて、わたしは本当に幸運だった。もしそうでなかったら、わたしもパパと一緒に闇へ葬り去られていた

と思う。だから、あらためてお礼を言わせて——どうもありがとう。おかげで、皆を動かす大きな炎を上げることができたわ」

「君は——」リチャードは、自らの力でその大願を果たした小柄な少女の姿を目に浮かべながら、しみじみと頷いた。「君の言葉どおりのことを成し遂げたんだねえ。君は、ヒーローになったんだ」

「いいえ。まだまだこれからよ。救わなきゃならない人は、きっとまだまだいるはずだもの」マアヤは電話の向こうでかぶりを振った。「それに……、わたしにとっては、運転手さんこそヒーローだわ」

「よしてくれ」リチャードは照れくさそうに笑った。「僕はそんな柄じやない」

「そう？」

「運転手のほうが性しょうに合ってるよ」

「お望みとあらば……」マアヤはちよつと残念そうに言った。「運転手さん」

リチャードとマアヤは電話口をとおして、互いに互いを讃えるように、短いあいだ小さく笑い合った。

「ところで——」リチャードの脳裏に、もうひとつ気がかりだったことがふと浮かんだ。というのも、マアヤの言い回しにすこしだけ引っかかりを感じたからだ。「君の念……」

「あつ、いけない！」リチャードが言いかけたところで、マアヤはその言葉を急に遮った。

「ごめんね、運転手さん。これからちよつと用事なんだ。もう切らないと」

「そうか……」深追いすることもなからうと思ひ、リチャードは引き下がった。「とにかく、元気でやりよ」

「うん、そうする」すこしの間があつて、マアヤは続けた。「ねえ、運転手さん。ひとつだけ、尋ねたいことがあるの」

「なんだい、あらたまつて」

「また、いづれ遊びに行つてもいいかしら」

「なんだ、そんなことかい」リチャードは目を細めた。「……もちろんだとも。先に知らせてくれるのなら、いつでも来るといいよ」

「ほんとに？」

「ああ」リチャードは頷いた。「僕らはもう知り合ひ……いや、友だちだろう？」

「……そうね」マアヤは嬉しそうにはにかんだ。「じゃあ、もう切るね」

「じゃあ、また」

「バイバイ」

マアヤがそう言うと、スピーカーから聞こえるのは静かな空気のノイズだけになった。数

秒待つて、リチャードがオフを押そうとしたそのときだった。

「あーっ、待つて待つて！」というマアヤの騒々しい声が聞こえてきた。「運転手さん、まだいる？」

「なんだい、そそっかしいなあ」

苦笑するリチャードをよそに、マアヤは電話口の向こうでまくし立てた。

「封筒のなかにもうひとつ、わたしからのお土産が入ってるから、あとで見てみてね。それじゃー！」

そして、リチャードに有無を言わず電話を切ったのだった。

相変わらず、にわか雨のような子だ——とリチャードは思いながら、いまはなにも発さないプリペイド機を眺めた。

「封筒のなか……？」

リチャードはプリペイド機をジャケットのポケットにしまうと、いまは彼の傍らの床に置いてある封筒を見やった。新聞紙以外にもが入っているようには感じなかった——いまの見た目にも、とくに嵩かさがあるようには思われぬ——が、いったいマアヤの言う“お土産”とはなんだろうか。

リチャードは床から立ち上がるついでに封筒を拾った。小箱や取り出した紙細工を置いた

折りたたみ式テーブルに戻って、彼は封筒のなかを探った。たしかになにか、軽く薄い——しかし、紙ではない——ものが彼の指先に触れた。リチャードが封筒をひっくり返して二、三度振ると、なにやら見慣れない物体が彼の掌に落ちた。

それは、直径二・五センチメートルほどの非常に薄く透明な円形の物体で、一見すると扁平だが、若干ではあるものの中心から同心円状に角度が付けられていた。巨大なコンタクト・レンズに見えなくもない。材質は塩化ビニルだろうか、すこし指に力を入れればクニヤリと変形するほど柔らかく、重さはほとんど感じられなかった。

表面を見ると、円の中央部だけわずかに半透明になっており、そこから見えるか見えないかの細いラインが三方向に伸びていた。そのラインの先には、これまた微小な白いゴマ粒のような部品が配置されており、それぞれを空想の線で結ぶと、円のなかに正三角形が現われた。さらに目を凝らせば、円の外縁部に沿って、もはや読み取れるかどうかもあるやしいくらい小さな文字で、コピーライトの表示が凹凸で打ってあった。

これはいったい——リチャードはその薄く小さな物体を眺めながら首を傾げた。これひとつで完成したものなのか、それともなにかの付属品なのか、そもそもマアヤがなぜこれをリチャードへのお土産だと言ったのかまったく見当がつかず、彼は眉を怪訝に寄せるばかりだった。

新たに降って湧いた疑問をひとまず脇に置いて、リチャードはロッカーから自分の小ぶりの靴を取り出すと、机の上の品々をそのなかに片付け、帰り支度とした。ロッカーに鍵を掛け、部屋の明かりを落としつつ廊下に出る。彼がなんとなく手に持ったままにしたマアヤからのお土産を、天井の灯かりに透かしながら歩いていると、向こうから出社してきたリナが現われた。

「お帰りですか？」そう尋ねるリナに、リチャードは気もそぞろに応えると、彼女はふと首を傾げた。「手にお持ちのそれ、なんですか」

「え？ ああ、このあいだここに来た……」リチャードは、少女のつじつま合わせに使った単語を急いで記憶のなから探り当てた。「あの姪っ子、覚えてるかい？」

「マアヤちゃんですよ」リナは微笑して頷いた。「あの子、元気にしています？」

「うん、おかげ様で。元気でやっているらしいよ」リチャードは少々複雑な気持ちで首を縦に振った。「その姪っ子が送ってくれたものなのだけど、これ、なにかわかるかい？」

「見てもいいですか？」

そう言っ手差し出すリナに、リチャードは少女のお土産を渡した。リナはそれを受け取ると、その理知的な瞳の焦点を手を持った透明な円に鋭く合わせ、すこしのあいだじっくりと検分した。やがてその正体に思い当たったらしく、彼女の眉がびくりと動いた。

「わかったかい」

「ええ、たぶん」リナは、視線を手の小さな物品を据えたまま応えた。「これは——いや、口で説明するより、実際にご覧になったほうがいいかな。うまくできるかわかりませんが……」

彼女はそんな不思議なことを言うと、さっとリチャードに背を向けた。リチャードがわからずリナの背中を眺めていると、さっと彼女が振り返った。見ると、両手を胸の前で合わせている。

「それじゃ……」と彼女は小さく口ずさむと、合わせていた両手をさっとスライドさせて左の掌を天井に向けた。すると、なんとということだろうか。

彼女の手の上で、赤い炎が揺らめいてるではないか。

既視感^{デジャヴ}というにはあまりにはつきりとした記憶に、リチャードは驚きのあまり目を見開いた。そして彼は、来たるべきもの——火災報知機のけたたましい警報とスプリンクラーの恐るべき放水——に備えて身構えた。しかし、リチャードの予感に反して、それらは起こらなかった。

「すみません。驚きましたか？」リナはリチャードのあまりの反応に、すこしの茶目つ気と申し訳なさを含んだ笑みを浮かべた。「これ——つまり、マアヤちゃんのお土産——は、手品

用のキットというか、すこし前に流行^{はや}った立体映像を映し出すタイプのおもちゃですね。吸盤の要領で片方の掌に馴染ませてから、反対の手でその表面を撫ぜると——」

リナはそう言つて、掲げた左手の上で右手を何度かスライドさせた。そうすると、その右手の動きに合わせて、掌の炎が消えては再び点^{とも}つた。

「表面の三点に小さな部品がありますが、これらが立体映像の炎を映写して作り出しているのでしょうか。電源は——」リナは、すこしばかり首を傾げた。「体温か、それとも人体電流か……これは調べてみないとわかりません」

「なんだ、そうなのか……」リチャードは啞然と応えた。「ありがとう、おかげですつきりしたよ。それだけが剥き出しで送られたものだから、その正体がさっぱりだったんだ」

「なら、よかったです」リナは静かに微笑むと、リチャードの手に少女のお土産を戻した。「それでは、わたしはそろそろ」

「ああ、気をつけて」

どうも、と軽く頭を下げて女子ロッカー・ルームに向かうリナを見送ったリチャードは、手に持ったお土産をジャケットのポケットにしまうと、足を帰路に向けた。いつものように事務室を抜けて玄関を通り過ぎ、同じ階にある別の会社へと出勤する人々とすれ違いながら、彼はエレベータ乗り場を目指した。下りのエレベータに乗り込んでみると、なかはリチャー

ドひとりだった。一階のボタンを押したリチャードがその近くの壁にもたれかかると、彼の口からふっと小さな笑いもれた。

「なんだ、そうか……」それは安堵のため息にも似ていた。「そうだったのか」

つまり、マアヤがあの日タクシーのなか、リチャードの目の前でやってみせたことは、すべてハッタリだったのだ。もちろん、実際に彼女は世界に向けた大きな烽火^{ファイア}を上げてみせたのであるから、その言葉自体に嘘はなかったわけだ。しかし、それはあくまで少女の実力であって、超能力とはなんら関係なかったのだ。

リチャードには、彼のそばで「やあい騙された」と満面の笑みでコロコロとはしゃぐ少女の姿が目^メに浮かぶようだった。それに対してリチャードは、いま彼のしているような苦笑とともに両手を上げて「参りました」と降参するしかないだろう。マアヤのいうお土産とは、あのとときのタネ明かしだったわけだ。

なんともはや……と、ひとしきり笑ったリチャードだったが、そのとき新たな疑問符が不意に脳裏をよぎった。

それは先日のことだ。

誤作動^{ミソドウ}を起こしたリチャードの車載火災報知機を技術師としてチェックしたドルフが、不思議そうに首を傾げながら言っていなかったか——まったく異常はなかった、と。

だとしたら——リチャードは不穩に眉をひそめた——あの日、タクシーのなかで火災報知機が鳴ったのは、いったいなぜなのか。あれがドルフの言ったとおり、そして、当初リチャードがそう思っていたとおり、誤作動ではなかったとしたら……？

思いがけず「ボン」という音が鳴り、エレベータの扉が開いた。目的のロビーに着いたのだ。開いた扉に促されるように、リチャードはエレベータをあとにし、朝の出勤で賑わうロビーをオフィス・ビル正入口に向かって静かに歩いた。その自動ドアをくぐって通りの雑踏のなかに出たとき、リチャードの口から小さくため息が漏れ、彼は足を止めた。そして、リチャードは自分の爪先を見るでもなく眺めながら、やがて彼自身のために肩をすくめた。

それが、どうしたというのだ。

念力放火の……超能力の有無なんてどうでもいいではないか。それが、あの少女になんのか関係があるのか。いや、あるはずがないではないか。マアヤはマアヤであり、なにも変わりはない。たとえ事実がどうであれ、彼女が強く気高い意思を持った、ひとりの少女であることに違いはないのだ。

リチャードは頭をもたげ、通りの天井を見上げた。そして、彼は遠い地上にいる小さな正義の味方に思いを馳せた。

その内なる炎を消すことなく、そう、自分のように消すことなく、わが道をひた走れ——

と、
そうは静かに胸中で心からのエールをマアヤに送ったのだった。

Someday, it will continue to the next episodes;

Friday: or *Cheese and Onions*

Thursday: or *House at the Pooh Corner*

Sunday: or *Up on the Roof*